5年ぶりの連研が始まりました!

４年に一度の第12期員弁組連続研修会が１年遅れで実施され、開講式と第１回研修が５月14日(土)の午後２時から行われました。

コロナ禍での開催ということで、従来の員弁組内寺院ではなく、いなべ市大安公民館を会場にしました。また、過密防止を理由に定員を設けましたが、受講者はその３分の２の16名となりました。

来年７月まで全18回の研修カリキュラムのうち、基本的に第３土曜の夜開講する13回は、全て組内の僧侶が講師となります。員弁組のカリキュラムに沿って話し合いのきっかけとなる問題提起があり、そして班別での話し合い法座、その後まとめの講話となります。また毎回仏事作法等を学ぶ時間もあります。残る５回は、開講式と修了式を含めて、外部講師による講義を採り入れます。

▲開講式

開会式では、ご本尊の前で讃仏偈のお勤めの後、木村英昭員弁組組長が挨拶され、そして、僧侶や門徒推進員など連研に関わるスタッフの紹介がありました。

▲木村英昭員弁組組長
東員町大木　明法寺

第１回目の研修では、本願寺連研中央講師である麻布明徳さんから、『連研とは』と題する講義がありました。「ちょっと立ち止まって見てみませんか」、「自分に気づく」、「連研とは？」などの点について分かりやすくお話をしていただきました。

▲麻布明徳さん

６月18日の第２回研修は、草薙善照住職による作法講習に続き「戦争をなくし、平和を築き上げるにはどうしたらよいですか」のテーマで十三日講浄願寺、丹羽龍美住職の問題提起を受けて、初めての班別話し合いがなされました。折しもロシアによるウクライナへの侵攻が続いている中でこのテーマのためか、受講者は熱心にかつ慎重に話し合っていました。

▲草薙善照さん
桑名市友村　照順寺

▲丹羽龍美さん
東員町鳥取　浄願寺

大安町丹生川　松隆寺　渡辺邦俊

紙面法話　歴代のアイデンティティ

丁度　自分が10歳の頃のことだったと思います
夕食の卓を囲んでいた時のことでした　ふと　祖父が父に話しかけました
「おまえは仏法で何が一番大事だと思うか?」　そういった内容だったと思います　父が言葉を濁していると　祖父は「わしは　…維摩居士の不二法門だと思うが…」と言ったと思います

父が答えて言うには「維摩と言えば在家の僧と違うか…」　その言葉の調子からして「意外なことを言うな…」という感じを受けました
自分はその時　維摩とは悪魔の親戚ぐらいに思い　印象に残っていたと思います

「ところでお前はどう考えているのか」と祖父が重ねて問うことに　父は「自分は自然法爾だと思うが…　親鸞聖人の言われていることだから…」と答えたと思います

その時の話はそれで終わったようでした

この話の様子がずっと疑問になっており　最近、隣寺の大学の教授先生と法要で同席した折に お尋ねしましたところ　「不二法門も自然法爾も同じことを言っているのだよ」と、いとも簡単に結論を下されました

考えてみますに祖父は昔から聖徳太子を尊崇しておりましたから維摩経の不二法門にも考えが進んで言っていたのかと思います

父といえば　生前よく「自分は浄土真宗でなかったら救われなかっただろう…」と独り言を言っていたことがありました　幼い時に母が亡くなってから 言うにいえない日々を送ってきただろうことに思い至り「むべなるかな」と変に納得したことでありました

また『善人なおもって往生をとぐ　いわんや悪人をやと言う言葉で宗教はつきる　それはキリスト教でも仏教一般にも通じるものである…』と世界的な哲学者の西田幾多郎先生が言われているとおり　身近にいる父が図らずも証明してくれたことかと思ったことでした

そこで　祖父や父が環境の変化や時間の経過にかかわらず　連続した同一の基盤を保ち続けてきたことに思い至り　不二法門と自然法爾とはどういうことかと興味を覚えました

不二法門とは最高の法門です。たった一つの最もいい方法という意味を表します。人間はそれに入ると、生死を超え、成仏できるということです。生と死、善と悪、罪と福、世間と出世間、煩悩と菩提など、皆相反する二項対立の概念ですが、それらはもともと二つに分かれたものではなく 、一つのものだという考えです。生きると死ぬなどを見極めることができれば、迷いも束縛もなくなる。つまり、不二の法門に入るわけです

一方、自然法爾とは、「阿弥陀仏が私たちに 南無阿弥陀仏とたのませて、浄土に迎えようと取りはからってくださっているから、私たちの方で、これが良いだろうか、あれは悪いだろうかと心配し迷う必要がないことを、自然というのだ」と示されます。

祖父や父の　保ち続けた自己同一性を今の言葉で『アイデンティティ』と言うそうですが　私自身はどうだろうと考えました　自分の好んで読んでいた作家の言葉で『知に働けば　角が立つ　情に棹させば　流される　意地を通せば窮屈だ　とかく人の世は住みにくい 』…小さな私にとらわれず この身を天地自然にゆだねて生きてゆきたいものです

夏目　漱石「草枕」より冒頭の言葉

中学の教師を奉職しておりました時　生徒の前に出る時 職員室で同僚の教師と語る時　自分は小心者で　絶えず理論武装をしてないと　不安で仕方がない性格だったようです　この漱石翁の言葉を念頭に置くようにしておりますとなんとなく落ち着きました

四字熟語にしますと則天去私と言うそうです

最近　生前の父の言葉がよく思いだされます　日常のことあるごとにその時の父の言った言葉が頭にこだまします　梅雨が例年より早く明けた今年のような暑さにへばっているとき『心頭滅却すれば火もまた涼し』というぞ　お前は少し辛抱がたらんのと違うか！？」なんて　よく聞かされてきたものです　今は　辛抱の足らない孫殿に言って聞かせていますが…

ナモアミダブツ

北勢町鼓　教昌寺　嵯峨真哉

いなべ寄席

四日市で公演活動をしていたいなべのメンバーが、地元でも開催できないものなのかと思案、協議の結果、この度の旗揚げとなりました。今後、いなべ５町のお寺さんを中心に巡演させていただきながら、ゆくゆくは専用の演芸場を設けたいと思っています。

代表　小林富生